

学外研修「東洋文庫で東洋学の史・資料の世界に触れるワークショップ」の 教育的効果について

小川 快之・仁藤 智子・齊藤 紅葉

キーワード…歴史学教育／学外研修／東洋文庫／史料の閲覧・実見

はじめに

歴史学系の専攻の大学教員にとって、自身の担当するゼミ生の学習意欲をどのようにして高め、それをいかにして上手く卒業論文づくりにつなげるか、という課題については、大学の歴史学の専門教育の要となるものだけに、多くの教員が自身の研究活動とも絡めつつ様々な工夫をしてきたと思われる。しかし、ゼミ生には、自主的に専門書や史料を読み込み、ゼミの場で積極的に発言するような学習意欲が高い学生がいる一方で、担当分野が他のゼミよりはなんとなく興味をもてそうといった感覚でゼミに入り、基礎知識も心もとなく、学習意欲もあまり高くはない学生が多くいるのも実情である。

つまり、こうした学習意欲が必ずしも高くはない学生にも学問の面白さを感じさせ、学習意欲が高い学生と上手く交流させながら、卒業論文の作業へと繋げることが課題となっていると言える。

そのための学習作業として、従来から史跡や博物館の見学が行われてきたが、ただ漫然と見学するだけではあまり教育的な効果は期待できないと思われる。見学をより有効性が高い学習作業にするためには、そのやり方について様々な工夫を加える必要があると考えられる。こうした点については、すでに筆者小川らが国士館大学文学部の学生を対象とした公益財団法人東洋文庫の書庫見学を中心とする学外研修において、ワークシートを用いて学生に「観察」や「気づき」の視点を提示しながら考えさせる試みを行い、その内容を検証している。その結果では、ワークシートでの問題提起が学生に教育的な効果を生んでいることが確認できたが、学生の学習状況に合った設問づくりや十分な事前学習をしなければよりよい効果を期待できないことも浮き彫りになった。^①

そこでさらに、その点を踏まえて、眞保昌弘氏と筆者小川が国士館大学文学部史学地理学科考古・日本史学コースの一年生を対象とした学外研修「吉田松陰・国士館と彦根藩主井伊家ゆかりの地をめぐる散策」を企画・運営し、その教育的効果を検証し、「講義や下調べ作業からなる事前学習」や「グループワークによる観察結果の検討会と発表会による事後学習」、そして「見学対象に関する詳細な解説を含むワークブックの作成と使用」が一定の教育的効果を生んでいることが確認できた。^②しかし、この学外研修は初年度教育として行ったものであり、ゼミ活動として行ったものではないため、こうした作業が三・四年生のゼミ活動や卒業論文の作業に対してどのような効果を生むのかという点についてはさらなる試みとその教育的な効果の検討が必要であると思われる。

そこで本稿では、そうした試みの一環として、「世界的に知られる東洋学専門の図書館兼研究所である東洋文庫の、一般には非公開の書庫の収蔵物と、ミュージアムで開催中の『東洋の医・健・美』展の見学をすることにより、東洋学の史・資料の世界に触れ、その多様性に対する理解を深めること」を目的として、二〇二三年八月二日（水曜日）に東洋文庫で実施した学外研修「東洋文庫で東洋学の史・資料の世界に触れるワークショップ」での試

みとその教育的な効果について考察してみたい。

なお、この学外研修は、筆者小川が主として企画し、筆者小川と筆者仁藤・齊藤の教員三名による勉強会やメール会議を経て実現したもので、国士館大学文学部史学地理学科の**日本古代史ゼミ**（担当：仁藤智子）・**日本近代史ゼミ**（同：齊藤紅葉）・**中国近世史ゼミ**（同：小川快之）に所属する三・四年生が参加した。

一 ワークショップの概要

まず、今回ワークショップを行った東洋文庫について説明しておきたい。³ 東洋文庫は、一九一七年に**三菱財閥の第三代総帥の岩崎久彌**（一八六五～一九五五）が、中華民国総統府の政治顧問を務めていたオーストラリア生まれのジャーナリストの**ジョージ・アーネスト・モリソン**（George Ernest Morrison：一八六二～一九二〇）の所蔵する中国関係の欧文文献の膨大なコレクション（**モリソン文庫**）を購入したことに始まる。

岩崎久彌は、モリソン文庫に加えて和書・漢籍をはじめとする東洋諸言語の文献を収集し、日本を含めた東洋全域を網羅するコレクションを構築したうえで、一九二四年に東京の本駒込の地に図書館兼研究所である財団法人東洋文庫を設立し、初代の理事長には同年まで大蔵大臣であった井上準之助が就任した。その後、第二次世界大戦後の混乱期には、支援をしていた三菱財閥の解体により経営が困難となつて、蔵書が散逸の危機に瀕したため、当時理事長であった元首相の**幣原喜重郎**の尽力によつて、国会の支援のもと国立国会図書館の支部とされた。

現在は支部ではなくなつたが、国宝などの貴重書を含む多くの書籍を所蔵する東洋学専門の図書館として、イギリスの大英図書館、フランス国立図書館、ロシア科学アカデミー東洋学研究所、アメリカのハーバード**燕京研究**



資料① 東洋文庫ミュージアムのモリソン書庫
(撮影：筆者仁藤)

所とともに世界五大東洋学図書館の一つに数えられている。また、研究部は日本を代表する東洋学の研究機関として知られ、台湾の中央研究院やフランス国立極東学院など海外の研究機関とも連携し、学界で評価の高い学術誌『東洋学報』も発行している。さらに、美しい書棚で知られるモリソン文庫の収蔵施設であるモリソン書庫があるミュージアムも併設され「資料①」、さまざまな企画展が開催されている。

今回の学外研修では、まず、学外研修の概要やスケジュール、閲覧する史・資料の詳細な解説、コメント記入欄などを掲載したワークブックを作成し、その内容を国士館大学の授業支援システムであるmanaba(マナバ)にアップして、参加する学生に事前学習をしてもらった。当日の参加者は、日本古代史ゼミ(七名)、日本近代史ゼミ(五名)、中国近世史ゼミ(九名・特別参加の大学院博士課程の中国人留学生一名を含む)の合計二十一名の学生と、各ゼミの担当教員三名となった。

当日は、十二時半から十三時に東洋文庫二階の講演室



資料② 相原佳之氏の説明を聴く学生たち（撮影：筆者小川）

にて、東洋文庫研究部課長の相原佳之氏より東洋文庫に関する説明を受け「資料②」、その後、ワークブックを使いながら筆者小川・仁藤・齊藤が、それぞれ自身が選んだ史・資料に関する説明を行った。

その後、十三時から十五時まで、A班（日本古代史ゼミ）・B班（日本近代史ゼミ）とC班（中国近世史ゼミ）に分かれて、書庫とミュージアムを交互に見学した。書庫見学では、東洋文庫研究員でもある筆者小川の案内・解説のもと、筆者仁藤・齊藤も適宜解説を行いつつ、史・資料を閲覧し、ワークブックのコメント記入欄に気になる点、さらに知りたい点などを記入する作業を行ってもらった。また、ミュージアムの展示については、ワークブックを使いながら気になる展示物三点を選ぶ作業をもらった。見学終了後は、随時講演室に入室し、十五時から十六時まで講演室で班ごとに観察結果の検討作業をもらった上で各班の代表者による発表会を行い、最後に筆者仁藤・齊藤・小川が総括となる解説を行ってワークショップを終えた。

二 ワークショップで閲覧した史・資料

ワークショップで閲覧した史・資料についてはワークブックに筆者小川・仁藤・齊藤がそれぞれ解説文を掲載し、コメント記入欄を設けた。以下で

は、ワークブックの記述に基づいて口語調のまま、閲覧した史・資料の解説文を記載してみたい。⁴⁾

(二) 清朝の郊祀に係る史料：『大清会典図』——東アジアの国家祭祀と王権——（担当：筆者仁藤）

中国の歴史は、多様で複雑です。そのため、国家儀礼や祭祀も国家の歴史的な変遷や経緯から複層的な構造を持つようになります。いくつもの民族によって王朝・国家が形成されては滅亡してきました。その中で、社会の規範として大切にされたのが「礼」です。南北朝時代の北魏の流れを汲み、統一国家として成立した隋・唐の礼は、礼制の集大成と考えることができます。八世紀に編纂された『大唐開元礼』を見てみると、五礼がその中心に置かれています。すなわち、吉（祭祀）・凶（喪葬）・賓（賓客・外交）・軍（軍旅）・嘉（冠婚）です。唐宋変革を経て、明・清の社会は大きく変容しましたが、この礼制は基本的に継承されました。

今回は、清朝の「会典」に書かれている天壇の記事を閲覧してみましよう。天壇とは、皇帝が天帝（天上界の最高神）を祀るための祭祀施設です。現在、北京のほか、韓国のソウル、ベトナムのフエなどに残っています。天帝を祀る郊祀といわれる国家儀礼を通じて、皇帝たちはその支配の正統性や権威を獲得していました。

そのため、中国の冊封体制に入った国や地域では、中国王朝の皇帝の天を共有することは許されず、郊祀を行うことはできませんでした。ソウルに残っているものは、一八九七年に大韓帝国の皇帝として高宗が即位したときに作られたものの一部です【資料③】。興味深いことに、日本でも平安初期に三回（桓武朝二回、文徳朝一回）だけ郊祀が行われました。⁵⁾

【閲覧史・資料①】『欽定大清会典図』（貴重書Ⅺ—3—A—b—219—0）巻一の天壇総図、巻五の圜丘上成位次・

二成以下位次、卷二十三～二十五の祭器



資料③ ソウルの圓丘壇【ファンゲダン】(撮影:筆者仁藤)

【解説】

「会典」とは官撰の政治制度・法制を集成した書籍のことで、清代の『大清会典』は康熙・雍正・乾隆・嘉慶・光緒の五朝で編纂されました。「会典図」は壇廟・鑾輿・儀仗・武備・天文・器皿・輿地などを図で説明したものです。東洋文庫は「光緒十二年敕撰欽定大清会典図」（光緒会典図）を所蔵しており、その巻一、礼一、祭祀典一には天壇に関する記述があります。今回は「圓丘壇」を中心とした絵図を見てみましょう。

天壇は、天神の位牌を祀る「皇穹宇」と祭祀を行う円形の祭壇である「圓丘壇」から成り立っています。資料をよく見てみると、圓丘壇に参列する官人たちはその身分によって立つ場所が決まっていることに気がつきます。宮中においても、「版位」という立ち位置の指標がおかれていました。それと同じ原理ですね。機会があれば、北京に残る天壇公園で清朝の「皇穹宇」を、ソウルで大韓帝国時代の「皇穹宇」や石鼓などを見てもらいたいと思います。

日本では、現在発掘調査などでその実態は明らかになっていませんが、河内国交野で行われたことが史料に記されています。

す。交野は、朝鮮半島にルーツを持つ百済王氏（百済の王氏）という氏族の本拠地でありました。桓武天皇はその母（高野新笠（たかののたけかさ））が渡来系氏族の出身で、その後宮には百済王氏の女性もおりました。その息子の嵯峨天皇の寵愛を受けたキサキにも百済王氏の女性がいました。その意味でも、平安初期の天皇は中国大陸や朝鮮半島の文化に親近感を持つていたと考えられます。漢詩文の盛行や文章経国（もんじょうけいこく）という思想もそのような時代の雰囲気の中ではぐくまれたと考えられます。⁽⁶⁾なお、天壇での祭祀については、未公開なのですが、『壇廟祭祀節次（だんびやうさいしせつじ）』（貴重書Ⅱ—15—C—8）という絵図を用いた清代の貴重な解説書も東洋文庫に所蔵されています。

（二）清代苗族の風俗図…『苗冊』——中国の少数民族の多彩な伝統文化——（担当…筆者小川）

中国は漢族が人口の大半を占めています。中国政府によれば、それ以外にチベット族やウイグル族など五十五の少数民族が存在しているとされています。これらの少数民族はそれぞれ独自の文化を育んできました。東洋文庫にはそうした少数民族の伝統的な生活文化を知ることができる貴重な史料も所蔵されています。

【閲覧史・資料②】『苗冊』（Ⅱ—11—K—22）乾隆四十一年（一七七六年）の献上品⁽⁷⁾

【解説】

中国西南部に住む少数民族である苗族（ミャオ族）の生活・習俗を描き、説明をつけた図冊です【資料④】。苗族の祭祀や歌垣（うたがき）（若い男女が集まり、求愛の歌を掛け合う習俗）、農作業などの情景が描かれていて、とても貴重な史料です。苗族は、明代には地元の有力者が地方官に任じられる土司制度のもとで、自治的な生活をしていました。しかし、清代に入り、漢族の移住が進み、乾隆帝の時代には周辺諸民族への支配が強化される中で、土司制度が改められ、中央集権体制を強化する改土帰流政策が進められたため、しばしば反乱が起きていました。この図冊



資料④ 『苗冊』の苗族（車寨苗）歌垣図
(筆者小川による模写)

はこうした状況下で、苗族への関心が高まり、作成されたものと推測されています。折^お本^{ほん}という形式の本で、手書きによる彩色の八十二の絵図と解説があります。絵図を見て清代の苗族の生活文化の特色について読み取れたことを書いてみましょう。

(三) 河口慧海将来写本チベット大蔵経

——チベットの仏教文化の輝き——

(担当…筆者小川)

チベットでは七世紀初めに伝来した仏教がチベット土着の民間信仰であるボン教と融合してチベット仏教が成立し、その後、政治から人々の日常生活にいたるまで仏教が浸透するようになり、独特な仏教文化が栄えました。学僧のツォンカパの思想を受け継ぐゲルク派（黄帽派）が最も有力な宗派で、その最高指導者がダライ・ラマです。チベットの中心都市のラサにあるポタラ宮は歴代ダライ・ラマがいた宮殿です。東洋文庫にはチベットで製作された貴重な大蔵経の經典が多く収蔵されています。大蔵経とは、仏教の經典やその解説書を集成した叢書のことです。一切経とも言います。

【閲覧史・資料③】河口慧海将来写本チベット大蔵経（蔵外文献333など）^⑧

【解説】

仏陀本来の教えが分かる書物を求めて日本人として初めてチベットに入学し、『西藏旅行記』（『チベット旅行記』の題名で、講談社や旺文社から刊行）を著した学僧の河口慧海（えが一八六六―一九四五）がチベットより日本へ将来した、手書きのチベット大蔵経です。この大蔵経は、一九一五年にダライ・ラマ十三世から慧海に下賜されたものと言われています。チベットの古文書は、椰子などの植物の葉を加工して、紙の代わりに用いた横長の貝葉（ばいぢ貝多羅葉）と呼ばれる筆記媒体に書かれています。保存する時には、それを綴じずに重ねたものを厚い板で挟むか、布に包み紐をかけた状態で書棚にならべます。最初の頁の表紙にはサンスクリット語とチベット語で経典名が記されています。文字は左から右に読みます。文字や紙質などの特徴を確認してメモしてみましよう。

（四）チエンバレンとモリソンに関連した資料

——東アジア近代の変動への外国人の眼差し——（担当：筆者齊藤）

東洋文庫には、明治時代に日本に滞在し、東京帝国大学文科大学（現在の東京大学文学部）で教員を務め、『日本事物志』などを著したイギリスの日本語学者・日本文化研究者のバジル・ホール・チエンバレン（Basil Hall Chamberlain：一八五〇―一九三五）の関係資料が所蔵されています。この資料の購求に係わったのがチエンバレンの教え子である上田萬年（元東京帝国大学文科大学長・文学部長：一八六七―一九三七）です。上田はモリソン文庫の購求にも助言し、一九三六―一九三七年にはチエンバレン関係書簡（百数十通）の入手に尽力しました。

東洋文庫の基幹をなすのがモリソン文庫です。同文庫はモリソンが北京等に駐在中のおよそ二十年間に腐心収集したもので、中国を中心としてパンフレット類約七千二百種を含む欧文図書二万四千冊、地図版画約千点、定期刊行物百二十種余で構成されています。なお、東洋文庫の蔵書には、特に重要なものとして、マルコ・ポーロの『東

方見聞録』（原題：『世界の記述』）の各種刊本五十四種、中国地方語辞書五百冊、日露戦争資料約三百冊、各国の中央アジア探検隊の調査報告等が含まれています。⁹⁾

今回の閲覧史・資料④のチェンバレン関係資料は日清戦争、⑤のモリソン文庫の資料は日露戦争、⑥は第一次世界大戦時期に関するものです。奇しくも東洋文庫という同じ所に集められた二つの資料群を通して、東アジアにおける近代の変動を、日本や東アジアに造詣の深い外国人関係者の視点から見てみましょう。

【閲覧史・資料④】ラフカディオ・ハーン、チェンバレン往復書簡類¹⁰⁾

Autograph letters from and to Lafcadio Hearn. (貴重書MS—82)

・ Pt. 1. Letters between L.H. and Basil Hall Chamberlain.

・ Pt. 5. Letters between L.H. and Basil Hall Chamberlain. 1893-94

【解説】

日本研究家で作家の小泉八雲（ラフカディオ・ハーン：Lafcadio Hearn：一八五〇～一九〇四）とチェンバレン間の書簡です。一八七三年（明治六年）に来日したチェンバレンは、在日英国公使館員のアーネスト・サトウ (Sir Ernest Mason Satow：一八四三～一九二九) らとともに、日本に残る古い文献や宗教観などを含め、日本について研究しました。駐日英国公使が奨励したこれらの研究は、学術としてだけではなく、外交上の観点からも行われていました。一方、ハーンは一八九〇年（明治二三年）に来日し、チェンバレンの斡旋で島根県尋常中学校、第五高等学校（熊本大学の前身の一つ）の英語教師となり、のちに帝国大学文科大学の英文学講師に任じられたと言われています。後に疎遠になるとされる両者ですが、明治二六、二七年頃は週に通ずつ手紙を書き合い、日本認識を深めていました。¹¹⁾

【閲覽史・資料⑤】モリソン文庫の日露戦争関係資料

④ Sketches of Manchurian battle-fields. With a verbal description of Southern Manchuria. An aid to the study of the Russo-Japanese War. (満洲の戦場のスケッチ。南満洲の言葉による説明付き。日露戦争の研究に役立つ史料) (モリソン文庫・貴重書Ⅲ—7—H—149)

⑤ Maps and figures of Russo-Japanese War. (日露戦争の地図と図) (モリソン文庫・貴重書Ⅲ—7—H—247)

⑥ The Russo-Japanese war. England's responsibilities. By a neutral. (日露戦争。Englandの責任。中立の立場) (モリソン文庫・貴重書P—Ⅲ—a—680)

【解説】

これらは日露戦争関係資料です。モリソンは一八九五年にイギリスの高級紙『タイムズ』の特派員に就任し、後に北京に駐在して活躍しており、同戦争中も北京等に滞在していました。④は一九一〇年の製作となっており日露戦争終了から五年程後のもの、⑤は「Englandの責任」に触れた資料と考えられます。これらの資料からモリソンが、日露戦争を通して、日露二国間の戦況に留まらず、各国の思惑や世界情勢への影響を戦後も捉えようとしていたことが窺えます。

【閲覽史・資料⑥】モリソン文庫の第一次世界大戦期の資料

Japan's demands on China. A discussion from the point of view of China and the treaty powers of the situation created by Japan's efforts to secure a predominant position in China. (日本の中国に対する要求。日本が中国における優位な地位を確保しようと努力したことで生み出された状況について、中国と条約締結国の視点から論じる) (モリソン文庫・貴重書P—Ⅲ—a—1132)

【解説】

東洋文庫の目録によると、同史料の製作は一九一五年とあり、第一次世界大戦中、日本が**対華二十一カ条要求**を提出した年と重なります。モリソンは、一九一二年に『タイムズ』の特派員を辞め、第一次世界大戦勃発時には辛亥革命後の中華民国（袁世凱政権）総統府の政治顧問となり、国際社会全体のバランスを考慮しながら、日中関係の変動を注視していました。

(五) 「南京条約図」——清末の動乱への外国人の眼差し——（担当・筆者小川）

アヘン戦争で清朝がイギリスに敗北して以降、国内では清朝打倒を目指す太平天国の乱が勃発するなど、清朝の政治や社会はウエスタン・インパクト（西洋の衝撃）と呼ばれる西欧列強による外圧によって大きく変貌を遂げ、中国の歴史は近代に入ります。その後辛亥革命までの政治・社会変動の時代を**清末**と呼びます。清末の動乱はヨーロッパや日本でも人々の関心を呼び、それを理解し伝えるために様々な書画が作成されました。東洋文庫には、そうした書画の一部も所蔵されています。ここでは代表的な「南京条約図」を閲覧してみましょう。

【閲覧史・資料⑦】「南京条約図」（E—2—A—48^⑩）

The signing and sealing of the treaty of Nanking [in the State Cabin of H. M. S. Cornwallis, 29th August, 1842
... with key-plate] / painted by Capt. John Platt ; engraved by John Burnet. (一八四六年、ロンドン刊)

【解説】

清朝がアヘン戦争でイギリスに敗れたため、一八四二年に、南京近くに停泊中のイギリスの軍艦コーンウォリス号で南京条約が調印されている光景をジョン・プラット (John Platt) が描いたものです。この条約でイギリスへ

の香港島の割譲、広州・廈門・福州・寧波・上海の開港などが決まりました。絵には清朝代表の耆英と伊里布、牛鑑がイギリス代表のヘンリー・ポティンジャー (Henry Pottinger) と会談している様子が描かれています。

登場人物の解説図もついているので、それを見るとどの人物が描かれているのかが分かります。アヘン戦争前は、清朝は周辺国と朝貢冊封による国際関係を結んでいましたが、アヘン戦争後、近代的な外交関係を結ぶ必要に迫られてゆきます。この絵からはどのようなことが読み取れるのか、考えて書いてみましょう。

(六) 乾隆帝の西方遠征戦勝図・『準回両部平定得勝図』

—— 清朝宮廷のキリスト教宣教師による芸術活動 —— (担当・筆者小川)

明末から清代の宮廷では、キリスト教の宣教師たちが、天文学や絵画・建築など様々な西洋の先進的な技術をもつ者として重用され、活躍していました。清朝最盛期の皇帝として知られる乾隆帝にもイエズス会の宣教師のジュゼッペ・カステイリオネ (Giuseppe Castiglione)、中国名は郎世寧・一六八八〜一七六六) らが仕え、多数の絵画などが作成されました¹³⁾。東洋文庫にはそうしたキリスト教宣教師の活躍が窺える貴重な史料も収蔵されています。

【閲覧史・資料⑧】『準回両部平定得勝図』(貴重書XI—3—A—b—218—0)¹⁴⁾

【解説】

乾隆帝は治世中十回にわたり大遠征を行い、それを「十全武功」と誇り、自ら「十全老人」と号していました。特に乾隆帝自身が輝かしい戦果を誇ったのが一七五五年(乾隆二十年)から一七五九年(乾隆二十四年)のジュンガル(準部)と東トルキスタン(回部)の遠征です。彼はその成果を長く記憶にとどめ、自らの功績を宣伝する

ために銅版画の制作を思い立ちました。

カステイリオーネら四人が下絵を描き、フランスのパリで、銅版画の名工として知られるシャルル・ニコラ・コシャン（子）らが銅版を制作し、印刷画と原版が清に届くと、乾隆帝の詩文とあわせて表装し、内務府で印刷して臣下に広く配布しました。緻密な絵で、馬などもリアルに描かれています。実は馬が兎のように前脚と後脚をそろえて走っているように描かれるなど不自然な描写もあります。その技法や宣教師たちが乾隆帝の戦いをどのようにアピールしようとしたのかを考えながらコメントを書いてみましょう。

以上が閲覧した史・資料の解説文である。なお、ミュージアムでは、古来アジアの人々がどのように不調や怪我、病氣と向き合ってきたのかを東洋文庫が所蔵する医療史の名著でたどる「企画展・東洋の医・健・美」が開催中¹⁵で、さらに「オリエントホール」世界の風呂紀行」「モリソン書庫」東西お守り大集合！」「名品室」記録された記憶——東洋文庫の名品でたどる世界の歴史」（『東方見聞録』『永楽大典』など貴重な書籍を展示）のコーナーも設けられていた。見学時の作業内容として、ワークブックには、「展示物の中から、自分が気になるものを三つ選び、気になった理由を書きましょう。見学後の班内の検討会では、班員の多くが気になったものを集約して三つ選び、その理由などを観察結果の発表会で発表しましょう」との文言も掲載し、コメント記入欄も設けておいた。

三 学外研修アンケートの結果の分析

今回の学外研修終了後に参加学生に対して、Google フォームを使ってアンケートを行ったところ、十九名から回答を得た。以下ではその内容について検証しながら、今回の学外研修の教育的効果について考察してみたい。

【1】 今回の学外研修の内容に興味をもちましたか？

この設問については、「はい」が十六名（八四％）、「まあまあ」が三名（一六％）、「いいえ」が〇名（〇％）となり、大多数の学生が興味を感じる内容であったことが確認できた。なお、ゼミごとでは、日本古代史ゼミが「はい」（三名）・「まあまあ」（二名）、日本近代史ゼミが「はい」（五名）、中国近世史ゼミが「はい」（八名）・「まあまあ」（一名）となり、日本古代史ゼミがやや興味の度合いが低いものの、全般的に大きな偏りはないように思われる。日本古代史ゼミが低かった理由は、日本古代史に直結する史・資料を閲覧しなかったためと考えられるので、今後は史・資料の選択に注意が必要であると思われる。しかし、一方で、卒業論文などに直結しなくても、史・資料を見ることが学生の学習意欲や興味を刺激することは確かであると言える。

【2】 今回の学外研修で歴史学に対する関心が高まりましたか？

この設問については、「はい」が十八名（九五％）、「まあまあ」が一名（五％）、「いいえ」が〇名（〇％）となり、ほとんどの学生が肯定的な評価をしており、歴史学系の三・四年の学生にとって非常に有用な学習活動となっ

ていることが確認できた。

【3】 今回の学外研修で東洋学の史・資料に対する観察眼が養われたと感じましたか？

この設問については、「はい」が十三名（六八％）、「まあまあ」が六名（三二％）、「いいえ」が〇名（〇％）となり、多くの学生にとって東洋学の史・資料に対する観察眼を養う作業になっていると感じられていることが確認できた。

【4】 今回の学外研修の中で興味をもったものにチェックをしてください。（複数可）

この設問の回答については以下のような結果となった。

①書庫：『欽定大清会典図』 ↓七名（三七％）

日本古代史ゼミ（二名）・日本近代史ゼミ（二名）・中国近世史ゼミ（三名）

②書庫：『苗冊』 ↓八名（四二％）

日本古代史ゼミ（〇名）・日本近代史ゼミ（二名）・中国近世史ゼミ（六名）

③書庫：チベット大蔵経 ↓十名（五三％）

日本古代史ゼミ（一名）・日本近代史ゼミ（四名）・中国近世史ゼミ（五名）

④書庫：チェンバレンとモリソンに関連した資料 ↓五名（二六％）

日本古代史ゼミ（〇名）・日本近代史ゼミ（四名）・中国近世史ゼミ（一名）

⑤書庫：『南京条約図』 ↓九名（四七％）

日本古代史ゼミ(四名)・日本近代史ゼミ(一名)・中国近世史ゼミ(五名)

⑥書庫『準回兩部平定得勝図』↓四名(二二%)

日本古代史ゼミ(一名)・日本近代史ゼミ(〇名)・中国近世史ゼミ(三名)

⑦ミュージアム『世界のお風呂紀行』↓五名(二六%)

⑧ミュージアム『東西お守り大集合』↓五名(二六%)

⑨ミュージアム『東洋の医・健・美』展↓十名(五三%)

日本古代史ゼミ(二名)・日本近代史ゼミ(三名)・中国近世史ゼミ(五名)

⑩ミュージアム『名品展』↓四名(二二%)

これを見ると、書庫の①②③⑤とミュージアムの⑨に多くの学生が興味を持っていることが確認できる。⑤は日本古代史ゼミでも関心度が割と高いところをみると、世界史上の有名な出来事に関する資料であるために多くの学生の関心を集めたものと思われる。日本古代史ゼミに関しては、今回は専門に近いものが少なかったためか、⑤以外はあまり興味をひかなかったようであるが、設問【1】の結果を見ると比較的的好評価であることが確認できるので、閲覧した史・資料全般に対しては興味があったものと思われる。

日本近代史ゼミは④、中国近世史ゼミは②③⑤が比較的の高い数値になっており、当然のことながら、自分の専門に近いものにより強く興味を示していることが確認できる。これを見ると、卒業論文の作業との関連を考えれば、ゼミの担当分野に近いものを閲覧する史・資料も盛り込むことがやはり重要になってくると考えられる。ただし、設問【1】の結果が示すように、専門と関わらなくても、学生が視野を広げるのに有意義な活動にはなっていることも窺えるので、専門に近い史・資料に加えて、専門外の史・資料を閲覧する作業も有用であると思われる。

【5】【4】で興味をもったもの（複数可）について、どのようなところに興味をもったのかを具体的に書いてください。

この設問については以下のような回答が見られた。

①書庫…『欽定大清会典圖』

「清王朝において、どのような所で儀式がなされていたのかについて興味をもちました。」「身分の違いを視覚化する方法がとられていたことのほか、日本との関連も含めて興味深いものであったように思います。」

②書庫…『苗冊』

「少数民族の日常を色鮮やかに描いており、青や黒を基調とした衣服や肉を供えているなど何かしらの行事らしき絵など、その背景が気になるものが多かった。」「ミャオ族の独特な服装に興味を持った。また、とても色鮮やかで頭に着けているバンドに赤と青の違いがみられたため、何で色分けされているのか気になった。」「絵の色彩が鮮やかで、男性・女性・子供まで、細かく細かく描かれていて面白いと思った。」「苗族の生活や風俗、服装について挿絵を用いながら解説している『苗冊』が気になった。そして『苗冊』を書いている人が筆跡の違いから複数人いることが推測でき、どのような人々が書いていたのか興味を持った。」

③書庫…チベット大蔵経

「チベット大蔵経があまり自分が見たことが無かった文字なのもあつたが、チベット仏教が日本の仏教とどのよう違うのかが気になった。」「経典が思っていた以上に大きく、チベットまで行くことも大変なはずなのに持ち帰りにはどれだけの人員が必要だったのだろうか」と興味を持った。また、サンスクリット語からチベット語に翻

訳されているものが、それを日本語で再解釈することが出来たことも興味深い。「日本ではあまり見ない読み物の形態をしていた。」「どのような経緯で貰ったのか興味を持った。」「大蔵経が想像していたよりも大きくて驚きました。また書かれている言語も梵字でもなく見たことのない字体であったので非常に興味深かったです。」

④書庫…チェンバレンとモリソンに関連した資料

「俯瞰して日露戦争の状況を描いた資料に興味を持った。」

⑤書庫…「南京条約図」

「船上ではイギリス人が圧倒的多数を占めており、剣も持っていることから、当時の条約では強引なものもかなり多く、中国（清）が条件を飲まざるを得なかった理由も絵からよく理解できました。」「犬が描かれていることなど、実際に資料全体を見てみないと気付かないような点があるところです。」「犬が描かれていたことに対して、何故犬が描かれたのか、その理由が気になったためです。」「南京条約は高校の世界史で聞いたことがあったので、それを描いた実物を見られたからです。」

⑥書庫…「準回両部平定得勝図」

「馬の描き方が、両足が浮いている状態で描かれていたことに興味を持った。」「特徴的な馬の走り方であったり武器の種類であったり細かく描かれていて、その時代、その事件の特徴を知ることができました。」

⑦ミュージアム…世界のお風呂紀行

「各時代や地域のお風呂を比較できて面白かったです。」

⑧ミュージアム…東西お守り大集合

「それぞれのお守りが、各地の伝統や思想が色濃く反映されたものであると確認できたためです。」

⑨ ミュージアム…「企画展…東洋の医・健・美」

「東洋の医・健・美」展では、中国で早くから健康や美に対する関心が存在していたことがわかりました。特に『十四経発揮』という鍼灸の教科書を見て、『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・チャイナ…天地争覇』という一九九三年の映画（武術家の黄飛鴻を主人公にした映画）でも孫文が外国人の前で鍼灸を披露していたことを思い出し、単純にツボをどのように探し出したのかについて気になりました。「現在では、美顔ローラーは、普及していて比較的の手に入りやすいものであるイメージがありますが、そのような美顔ローラーにヒスイが使われていたり、庶民には手の届かないものであったものが、時代が変わるとともに広く普及していくことが面白いと思います。また、こんなにも歴史のあるものだとということを知り、人々の美意識について興味を持ちました。」既知に知っていた知識との繋がりを考えることができたためです。「卒業論文で今、史料として取り上げようとしているもの（『山海経』『導引図』など）の実際の史料に見られたことです。また、司書科目で勉強したような和綴じの史料が見られたことです。」自分の身近にあるものと比較しながら見ることで、考えさせられることが非常に多くありました。私自身、卒業論文のテーマについて悩んでいましたが、身近なものからテーマを決めてみることも良いのではないかと考えるきっかけとなったように感じています。

⑩ ミュージアム…名品展

「ミュージアムでは名品展が一番興味深く、特に敗者とされる者たちの視点から歴史上有名な関ヶ原の戦いのその後も書いた『石田三成記』と鳥がとても精巧に描かれていた禽鏡の内容をもっと知りたいと思いました。」

さらに、今回閲覧した史・資料全体について以下のような回答が見られた。

「海外の視点から中国の文化と歴史を回顧し、改めて中国の事情を認識し、自分の考えも変わりました。」（中国人留学生）「絵画から得られる当時の国々の情勢などを知られることです。また、当時の人々の意識や考えを知られたところです。」「卒業論文で書く」としていたテーマに関する史料を見られて興味を持たざるを得なかったです。「描かれている人や物、動物、本の形態や歴史について強く興味を持った。」「歴史を具体的なもので見ていくことよって自分が以前から持っていた知識がさらにプラスされるようなところに興味をもちました。」

以上の回答を見ると、一般的に史・資料の丹念な観察により学生たちが考察を深め、様々な視点からコメントを書いていること、また、「(チベット大蔵経の文字は)見たことのない字体であったので非常に興味深かった」「南京条約は高校の世界史で聞いたことがあったので、それを描いた実物を見られたから」「自分が以前から持っていた知識がさらにプラスされるようなところに興味をもった」といったコメントがあり、設問【2】の結果を裏付けるように、今まで目にしたことがない史・資料やよく知っている事件に関する史・資料の実物を閲覧するという作業が学生たちの歴史学への関心を高めていることが確認できる。

そして、「南京条約図」について「犬が描かれている」とのコメントがあるように、細かい点にも注意が向けられ、また、『苗冊』について「何で色分けされているのか」「筆跡の違いから複数人いることが推測でき、どのような人が書いていたのか興味を持った」とのコメントがあるように、丹念な観察により、学生たちの観察眼が養われ、さらなる知的好奇心を高めていることも分かる。

さらに、卒業論文づくりとの関係性について言えば、「卒業論文のテーマについて悩んでいましたが、身近なものからテーマを決めてみることも良いのではないかと考えるきっかけとなった」といったコメントがあり、実物の



資料⑤ 班代表の学生による観察結果の発表会の様子
(撮影：筆者小川)

史・資料の閲覧が、卒業論文の作業に好影響を与えていることも確認できる。

【6】 今回の学外研修で役に立ったと思う作業にチェックをしてください。
(複数可)

この設問については以下のような結果となった。

- ① 事前学習 (Manabaでのワークブックによる予習) … 九名 (四七%)
 - ② 事前学習 (研究員・教員によるレクチャー) … 十三名 (六八%)
 - ③ ワークブック (閲覧物一覧も含む) の解説 … 十七名 (九〇%)
 - ④ ワークブックの記入作業 … 五名 (二六%)
 - ⑤ 事後学習 (各班の観察結果の検討会と発表会) … 七名 (三七%)
- 【資料⑤】

これを見ると、教員などによるレクチャーとワークブックの解説が学生にとって非常に有用なものとなっていることが分かり、学外研修の教育的効果を高めるためには、十分な事前学習やワークブックの解説が重要であることが再確認できる。

〔7〕ワークブック（閲覧物一覽も含む）の内容について、役に立ったこと、興味をもったこと、こうした内容や作業もあればよいと感じたことなどを具体的に書いてください。

この設問に関しては以下のような回答が見られた。

「ワークブックの展示物の説明が凄く詳しくて、読みやすかったです。コメント欄に感想を書くところもあり、とても良いデザインです。」「ワークブックの内容は時代背景や関連人物について詳しく書かれていたので史・資料への理解度を上げるのにおおいに役に立ったと思います。また、チベット仏教文化についての知識が少し身につきました。」「ワークブックの解説が役に立った。内容については、どれか一つでも、全体もしくは班で解説を交えながら史・資料を読んでみたり、読み解きをしてみたいです。今回は、さっとみて特に深掘りはしなかったため、もう少しどこかに焦点を当ててその史・資料についてのワークをしてみたいと感じました。」

「史・資料に関する説明や由来を学ぶことによって、より史・資料に対する理解が深められた点が良かったと感じました。」「実際に解説を聞きながら見ることができてよかったです。」「自分でワークブックを読むだけでは理解できなかったことも、先生方の解説を聞いたことで何となく理解することができて、書庫やミュージアムの見学でポイントを抑えることができました。」「適宜絵や資料が用いられていて非常にわかりやすかったです。」「郊祀について、そもそも日本の天皇は神の子孫とされているため清朝で天帝を祀ることは異なる点があったこと、日本でも三回だけ行われていることに興味を持った。」「史・資料についてあらかじめ知ってから実際に行けたのはすごく良かったと思った。」「メモスペースがあつて良かったです。」「研究員の方の解説付きで史・資料を見ることが滅多にないので、非常に貴重な経験でした。」

「今回のワークブックには展示物の説明だけでなく、その下にメモ欄があったことで後から見返した時に思い出しやすくなっている作りがとても良かったと思います。」「ワークブックには、史・資料を閲覧するにあたり、その前提として理解しておくべき内容が記載されていました。その点で、事前学習に役立てることができました。当日は、史・資料を見る時間が多く、事前学習による理解がなければそれほど深い知識は得られなかったように思います。事前学習に役立てることのできたワークブックの存在は非常に大きいと感じました。」

「ひとつひとつのことについて、詳しく記載されていて役に立った。」「ワークブックでより理解を深めることができました。」「ワークブックを使用したことによって自分で疑問を感じたり、考察ができたりして自分の今後の課題などを考える際に参考になる場面が多かった。」「ワークブックに解説を載せてあったことで講義だけでなく実物を見ながら概要を見返すことができ、学習の一助となった。」

以上の回答を見ると、詳しい解説やコメントの記入欄付きのワークブックが、教員・研究員の解説と相互補完しながら、学生の理解を深める効果を生んでいること、解説文の書き方もほぼ学生の理解度にあっていることが具体的に確認できる。また、ワークブックを事前に授業支援システムである manaba（マナバ）にアップしたため、事前学習がより充実したことも分かる。さらには、「どれか一つでも、全体もしくは班で解説を交えながら史料を読んだり、読み解きをしてみたい」とのコメントがあるように、史・資料を絞って深掘りするグループワークを導入すればさらに効果を生む可能性があることも窺える。

【8】 今回の学外研修に参加してみた感想やさらに知りたいことなどについて書いてください。

この設問については以下のような回答が見られた。

「ミュージアムで見学をする時、二階に登って、本がいっぱいあるので、まるでハリポッターみたいな魔法の世界に潜入した気がしました。日本でこんなに中国の書物を所蔵していて、不思議に思いました。また、一番気になる書物は『山海経』です。子供のころから知っている古典の物語で、たとえば、『精衛填海』(不可能なことを企て失敗するという話)『夸父逐日』(身の程知らずの行為をするという話)など、子供の時から馴染んでいる神話故事をもう一回復習することができ、本当に貴重な体験になったと思います。さらに、美顔ローラー、緑色の宝石のリング、玉石の枕などを観賞し、どの時代でも人間は健康と美を追求する気持ちは同じなのだと思います。展示物の中では、中国の古典劇、清朝の時代劇によく出てくるものがたくさんあり、実物を見ることができて、本当に面白かったです。」(中国人留学生)

「書庫には今回見た史料の他にも色々興味深いものが多かったので、日本史を含めた東洋の歴史を知る上でとても良い経験になりました。また、ミュージアムの医学についての展示を見て中国は日本よりも発展しているところがあつたと改めて感じました。中国の文字やくずし字も読めると更に面白かったのではないかと思いました。」
「たくさんの史・資料を見ることができました。気になる点が様々出てきましたが、それを解決して知るところまでできると、より良いと感じました。」

「一般公開されていない貴重な史料を見ることができたので、非常に有意義な時間であつたと思った。」
「個人ではきつと行くことがない場所で、書庫見学などもでき貴重な経験になったと思った。」
「(コロナ禍で) こういう

た機会に恵まれなかった学年なので実際に対面での研修は楽しく、直に史・資料を見られて得られるものが多かったです。」「本物の史・資料を自分の目で見て解説を聞きながら見学が出来たのはすごくいい経験になった。今では、史料などをオンライン上で閲覧できるものもあるが、本物を目の前にするとその感動はとても大きく、友達と意見を出しながら見学ができとても有意義な時間だった。」「卒業論文、頑張ります。」

「日本古代史ゼミだからあまり関係がないと考えるのではなく、時代間の繋がりを意識して考えることがとても重要であると再認識することができた研修になった。」「様々な東洋の史・資料を見る貴重な機会だったので良かったなと感じました。」「倉庫ごとに室温が異なったり、保管している環境にも気を遣っているということがよくわかって興味深かった。今度は史・資料を利用するために行ってみたいと思った。」

「普段は絶対に見られないであろう博物館の収蔵庫に入れたのはとても貴重な経験をしたと思った。最初は少し緊張したが、先輩方の明るい雰囲気のお蔭で私も楽しく見学することができた。」「中国、朝鮮、日本それぞれの王朝の正統性を誇示するための儀式や史料についてです。」「東洋文庫は今回初めて訪れたが史・資料の多さとその種類の多様さに圧倒された。小川先生による閉架書庫ツアーも非常に興味深いものばかりで充実した学外研修であった。」

「今回は、一学生として普段は入ることのできない書庫に入ることができたという点で、貴重な経験をさせていただいたと感じています。それだけではなく、あらゆる面で良い経験ができました。例えば、事後学習の発表会では、幾つかの史・資料を目にして個々人が感じ取るものが異なるところに面白味や興味を感じ、それを他者に伝えるため言語化するという力を鍛える良い経験ができました。今回の経験をこれからの活動にも活かしていけたら良いと思います。」

「さまざまな時代の絵をみたり、書物を見たり出来て勉強になりました。」「普段見ることでできない収蔵資料をたくさん見ることができて、非常に貴重な体験になりました。」「学外研修をやったことよって自分が思っている歴史の見方や考察など漠然としていたものが確信に近づいていくような感じがして非常に興味深い研修だった。」「通常では目にすることができないような物を間近で見ることができて非常に楽しかった。今回の研修で特に印象に残っているのはチベット大蔵経で、知らない言語で、しかしそこに載っているのは偉大な教えであるという点に非常に興味が湧き、他の経典についても気になった。」

これらのコメントを見ると、一般には非公開の閉架書庫で、様々な実物の史・資料に触れるという作業が、歴史への好奇心を非常に高め、また、学生同士で交流しながら見学し、グループワークや発表会で他者の意見を聞き、自らも意見を言う作業が歴史学の面白さを感じさせていることが分かる。インターネットなどで気軽に様々な史・資料に触れる機会が多くなっているもの、やはり、直に実物の史・資料に触れることが学生にとって歴史学への興味を高める上で極めて重要な作業となっていることが、改めて確認できる。

さらに「気になる点が様々出てきましたが、それを解決して知るところまでできると、より良いと感じました」「中国の文字やくずし字も読めると更に面白かったのではないか」「卒業論文、頑張ります」というコメントがあるように、史・資料の読解や卒業論文の作業に対する意欲を高める効果を生んでいることも窺えた。

おわりに

本稿では、学外研修「東洋文庫で東洋学の史・資料の世界に触れるワークショップ」での試みとその教育的な効果について考察してみた。今回の学外研修では、詳細な解説とコメント欄からなるワークブックを作成・活用し、授業支援システムの manaba (マナバ) や対面での事前学習、グループワークによる観察結果の検討会と発表会を実施したが、こうした一連の作業がゼミに所属して卒業論文に取り組み三・四年の学生にも、歴史学への興味や知的好奇心を高め、史・資料に対する観察眼を養い、さらに研究活動や卒業論文の作業への意欲を増す作業となっていたことが確認できた。

こうしたことから言えば、三・四年が学ぶゼミの学外研修の教育的効果を高める上で、「閲覧する史・資料に関する詳細な解説つきのワークブックの作成と活用」「ワークブックと教員の解説による十分な事前学習」「グループワークによる観察結果の検討会と発表会による事後学習」が極めて重要であると言える。また、今回の学外研修の実施に当たって、先述したように、教員が史料を選別して事前に勉強会をしたことや、ワークブックの執筆にあたってメール会議を重ねたことも、学習効果を高めるためには必須であることが明らかになった。

なお、ゼミの担当分野に絡めたものが多い方がそのゼミに所属する学生の興味を高めることになると思われるため、閲覧する史・資料の選定はゼミ生の関心も十分踏まえて慎重に行う必要があることも窺えた。また、学生のコメントにあるように、今回は余裕がなく行えなかったが、史・資料を絞って深掘りするグループワークも導入すればより高い教育的な効果を生むのではないかと思われた。

さらに今回の学外研修では、なによりも、多くの学生が指摘するように「史・資料の実物に触れる」ことの重要性を再認識させられた。インターネットで史・資料を簡単に見られる時代であっても、やはり、「実物」が学生の感性に与える影響は大きいと考えられる。目にしたことがない史・資料やよく知っている事件に関する史・資料の実物を閲覧する機会をゼミの学外研修で設ける作業は極めて有用であると言える。

また、今回の研修は四年生を主として実施されたが、本稿の分析を踏まえると、卒業論文のテーマを決める前、三年生の早い時期に史料に触れることも大切なのではないか、と考えさせられた。今後もさらにゼミ生の関心を高められるような史・資料の探索を進め、その史・資料により歴史学の面白さを伝える効果的な教育法を探求し、新たな試みを行い、その効果について検証してゆきたいと考えている。

註

- (1) 筆者小川は東洋文庫研究員の中村威也・相原佳之の両氏と共同研究の場である漢籍教材研究会で学外研修の内容を検討し、その成果を以下の論文にまとめている。小川快之・中村威也・相原佳之「東洋文庫等での東洋史学コースの学外研修の教育的効果について」(『国士館人文学』第九号、二〇一九年)。中村威也・小川快之・相原佳之「中国のメディアの歴史をテーマとした東洋文庫での学外研修の教育的効果について」(『国士館人文学』第一二号、二〇二二年)。
- (2) 眞保昌弘・小川快之「学外研修『吉田松陰・国士館と彦根藩主井伊家ゆかりの地をめぐる散策』の教育的効果について」(『国士館史学』第二七号、二〇二三年)。
- (3) 東洋文庫やその収蔵物については以下の文献を参照した。『世界のなかの江戸・日本——(財)東洋文庫のコレクションを中心に』(東京都江戸東京博物館、一九九四年)。『東洋文庫の名品』(東洋文庫、二〇〇七年)。『時空をこえる本の旅五〇選』(東洋文庫、二〇一〇年)。『記録された記憶・東洋文庫の書物からひもとく世界の歴史』(山川出版社、二〇一五年)。『アジア学の宝庫、東洋文庫——東洋学の史料と研究』(勉誠出版、二〇一五年)。『時空をこえる本の旅二四 大清帝国展』(東洋文庫、

- 二〇二〇年)。「時空をこえる本の旅二九 東洋文庫名品展——「東洋学」の世界へようこそ」(東洋文庫、二〇二一年)。
- (4) 今回の学外研修では高校の世界史教科書や各種教材などにしばしば掲載されている銅版画の「アヘン戦争図」(E—2—B—5、6・モノクロ版・カラー版)も閲覧予定であったが、貸出中であつたため閲覧ができなかつた。この「アヘン戦争図」は、一八四一年一月七日に珠江河口付近でイギリスの軍艦ネメシス号が清軍のジャンク船(木造の帆船)に艦砲射撃をしている様子、イギリスの水彩画家のエドワード・ダンカン(Edward Duncan: 一八〇三—一八八二)が想像して描いたものである。カラー版(銅版に彩色したもの)では、もとのモノクロ版にあるボートが消されている。有名な絵の割にボートが消された理由など不可解な点が多く、吉澤誠一郎「ネメシス号の世界史」(『パブリック・ヒストリー』第一〇号、二〇一三年)で考察されている。
- (5) 仁藤智子「古代王権の由緒と正統性」(『古代史をひらくII古代王権——王はどうして生まれたのか』、岩波書店、二〇二四年刊行予定)、コラム「復活した昊天祭祀と大韓帝国」(同上)。中国と日本の王権については中村威也・小川快之・仁藤智子「オンライン授業で考える中国と日本の王権と音楽」(『国士館史学』第二五号、二〇二一年)等参照。
- (6) 仁藤智子「平安初期における王権の多極構造——皇位継承と王権内の女性の位相」(『新川登亀男編「日本古代史の方法と意義」勉誠出版、二〇一八年)。同「嵯峨天皇」(『新古代史の会編「人物で学ぶ日本古代史3平安時代編」』、吉川弘文館、二〇二二年)。
- (7) 前掲『世界のなかの江戸・日本』一〇七頁(一九九、苗冊二帖)、前掲『東洋文庫の名品』二三七頁(一四六、苗冊)参照。東洋文庫には、苗族の風俗図として、この資料のほかに『苗族風俗図』(II—11—K—14—0)も所蔵されている。苗族の風俗図と言えば、嘉慶年間に貴州八寨理苗同知であつた陳浩が制作したとされるが現存していない。「八十二種苗図並説」の挿絵に由来するさまざまな抄本が有名で、「百苗図」と総称され、各地の図書館などに散在している。なお、本文は現存する李宗昉の『黔記』に転載され、広く知られている(杜薇「百苗図匯考」、貴州民族出版社、二〇〇二年等参照)。「苗冊」は乾隆年間のものと思われるため、それに先駆けた貴重な風俗図と考えられる。また、京都大学には、『進貢苗蛮図』(雍正年間・陳枚作画、京都大学貴重資料デジタルアーカイブで公開)、『苗族画譜』、『滇省苗図』、『黔省苗図』、『苗図』が所蔵されており、その影印本である田中和子・木津祐子編『京都大学蔵苗図五種』(商務印書館、二〇二二年)が刊行されている。今回は準備のための余裕がなく、これらを踏まえた十分な解説はできなかつたが、これらとの関係性も踏まえながら、苗族の風俗の特色について説明を加えればさらに学生の理解が深まり、興味も高まつたのではないかと考えられる。なお、清朝と苗族の関係については、張勝

蘭「清朝の対『苗』政策と『苗』伝統社会のリーダーについて」(『早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌』第四号、二〇一六年)等参照。なお、佐藤若菜「衣装と生きる女性たち——ミャオ族の物質文化と母娘関係」(京都大学学術出版会、二〇二〇年)では、新中国成立以降の「ミャオ族」カテゴリーは、多様な人々を内包して形成されたものであることが指摘されている。

- (8) 前掲『東洋文庫名品展』一九頁(二三)、写本チベット大蔵経」参照。なお、日本に所蔵される貝葉(貝多羅葉)の経典としては、留学僧が将来したと考えられ、清凉寺などの寺院で保管されているものがあり、松田和信「清凉寺貝葉」(『仏教大学仏教学部論集』第一〇五号、二〇二二年)に詳しい。また、法隆寺旧蔵の「梵本心経並びに尊勝陀羅尼 附 訳経記」が知られる。これは皇室に献納された後、東京国立博物館に所蔵され、重要文化財に指定されている。この資料については齊藤紅葉「岩倉具視と「文化外交」——大蔵経、法隆寺の貝多羅葉写しのイギリスへの送付を通して」(『人文学報(京都大学人文科学研究所)』第一一九号、二〇二二年)参照。

(9) 岡本隆司編『G・E・モリソンと近代東アジア——東洋学の形成と東洋文庫の蔵書』(勉誠出版、二〇一七年)等参照。

- (10) 前掲『時空をこえる本の旅五〇選』一〇二―一〇三頁(ハーン、チェンバレン往復書簡)、前掲『東洋文庫の名品』二六六―二六七頁(一六八、ラフカディオ・ハーン、チェンバレン往復書簡)参照。

(11) 楠加重敏「ネズミはまだ生きています——チェンバレンの伝記」(雄松堂出版、一九八六年)二二―二三頁、平川祐弘「解題」(『東洋文庫監修『ラフカディオ・ハーン、B. H. チェンバレン往復書簡』下巻、勉誠出版、二〇一六年)。チェンバレンは、自身の死後に刊行された『日本事物誌』第六版において、ハーンを批判的に評した。このようなチェンバレンとハーンの関係について、「頭で日本を理解した人物」と「心で日本を愛した人物」の差異であるとの見解がある(平川祐弘「破られた友情——ハーンとチェンバレンの日本理解」、勉誠出版、二〇一七年)。ここには、外交上の視点から日本のみならず朝鮮や中国など東アジアを研究したチェンバレンと、外交に主眼を置かなかつたハーンとの差も読み取れる。それは、オックスフォード大学のサンスクリット学教授マックス・ミュラー(Friedrich Max Müller: 一八二三―一九〇〇)が、学術研究を主な目的として日本の仏典に関心を寄せたのに対し、チェンバレンが朝鮮研究に関心を移したことに見られる両者の相違(前掲齊藤「岩倉具視と「文化外交」」にも共通すると考えられる。明治期、外国人から見た日本を考えるうえで興味深い観点である。

- (12) 前掲『記録された記憶』一五八―一五九頁(南京条約図)、前掲『大清帝国展』三一頁(二八、南京条約図)参照。

(13) 王凱『禁禁城の西洋人画家——ジュゼッペ・カステイリオーネによる東西美術の融合と展開』(大学教育出版、二〇〇九年) 等 参照。

(14) 前掲『記録された記憶』一六〇―一七頁(準回両部平定得勝図)、前掲『時空をこえる本の旅五〇選』六四―六五頁(準回両部平定得勝図)、前掲『大清帝国画』一二―一三頁(一一、準回両部平定得勝図)、『時空をこえる本の旅三二』本から飛び出せ―のりものたち』(東洋文庫、二〇二二年) 一五頁(一三、準回両部平定得勝図) 参照。一から五図がジューンガル征服戦の図、六―一三図が東トルキスタン(回部) 征服戦の図、一四―一六図が猷首級・凱旋の図。なお、この資料の制作については、韓普景「清代の銅版画『平定準回両部得勝図』の制作について」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第六二号、二〇一七年) で詳しく考察されている。

(15) 「企画展・東洋の医・健・美」の展示物については、『時空をこえる本の旅三四 東洋の医・健・美』(東洋文庫、二〇二三年) 参照。

【追記】 今回の学外研修では相原佳之氏・清水信子氏はじめ東洋文庫の研究員・職員の方々に色々ご協力頂いた。記して感謝の意を表したい。